

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：82674

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2013

課題番号：25590155

研究課題名(和文) 幼老統合施設における世代間交流型ケアプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of intergenerational care program at a Child-Senior Integrated Institution

研究代表者

藤原 佳典 (Fujiwara, Yoshinori)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長

研究者番号：50332367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼老統合ケア施設「文京ひかりの里」において、世代間交流プログラムを実施し、その評価について高齢者、園児、施設職員を対象に質・量的調査を行い、「幼老統合ケア型世代間交流プログラム」を検討することを目的とした。その結果、施設における世代間交流プログラムの有用性として、認知症症状の緩和、スタッフの認知症理解、園児の社会的発達などが示唆された。さらに、入居者の認知症症状および園児の年齢に応じた職員のコーディネーター役割を含めたプログラムが提案された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to evaluate the intergenerational programs at a Child-Senior Integrated Institution for institutional elderly, preschool children and staff. These results revealed effects of the program such as care of dementia, staff's understanding of elderly people with dementia and social development of preschool children. Furthermore, we suggested new programs in which the staff take the role of coordinator according to the developmental stage of children and the condition of dementia.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：幼老統合ケア 世代間交流 認知症高齢者

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化の進展を背景に家族間および地域内のつながりが希薄化している現代社会において、高齢者と子どもをめぐる社会問題は後をたたない。核家族化の進展により、高齢者の社会的孤立が問題となっており、さらに認知症高齢者数の増加にともない、地域全体のサポート体制づくりが急務になっている。また、経済的な社会格差の広がりは、子どもの教育格差を生み出しており、この格差を解消する取り組みは遅々として進展していない。

こうした事態の中で、高齢者福祉施策と子育て支援策を統合させた「幼老統合ケア」に注目が集まっている(北村, 2005)。その一方で、高齢者福祉施策と子育て支援策の縦割りシステムの弊害から、「幼老統合ケア」が普及していない実態も報告されており、「幼老統合ケア施設」における世代間交流の効果を検証することが喫緊の課題となっている(多湖, 2009)。「世代間交流」とは、「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」と定義されており、高齢者と子どもの相乗効果を前提に構築されたプログラムを「世代間交流プログラム」と称されている(Newman, 1997)。これまで「幼老統合ケア施設」における世代間交流プログラムの相乗効果はほとんど検証されておらず、検証されていたとしてもインタビュー調査や観察調査による事例調査のみが行われてきた(立松, 2008; 中井, 2009)。「幼老統合ケア施設」を評価するにあたり、施設統合による経済的評価に併せて、入所から世代間交流の実施に至るまでのプロセスに応じた心理社会的評価を行うことが求められる。

2. 研究の目的

幼老統合ケア施設「文京ひかりの里」において、世代間交流プログラムを実施し、その評価について高齢者、乳幼児・児童、施設職員を対象に質・量的調査を行い、「幼老統合ケア型世代間交流プログラム」を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 「文京ひかりの里」における世代間交流効果の検証

研究対象: 2013年6月までに「文京ひかりの里」入所した高齢者20名(女性13名、男性7名)、および施設職員18名を対象とした。**調査時期:** 「文京ひかりの里」が開所された5月から翌年の3月にかけて、3回の調査(ベースライン・追跡1・追跡2)を実施した。

評価項目:

施設高齢者対象調査

認知症症状について、DBDスケール(Dementia behavior Disturbance Scale)、NPI(Neuropsychiatric Inventory)を用いて施設職員による評価を行った。

認知機能に関して、MMSE(Mini-Mental State Examination)、HDS-R(改訂長谷川式簡易知能評価スケール)により測定をした。

園児との交流は、施設高齢者の表情による心理評価スケール(PAFED)を用いて研究員が交流場面の観察をして評価を行った。

施設職員対象調査

介護負担尺度得点(J_ZBI_8)、認知症の人に対する態度得点(肯定的な態度/否定的な態度)、高齢者イメージ得点(SD法)を使用した。

(2) 「幼老統合ケア型世代間交流プログラム」の質的評価

調査方法

保育士により日常の「施設高齢者と園児との交流」について記録された「交流日誌」の内容分析を行った。具体的に、施設高齢者と園児との交流について、心理学を専門とする研究者同士の議論によりカテゴリー化した上で、各事例における保育士のコーディネーター機能について検討を行った。

さらに、「文京ひかりの里」の職員および施設高齢者を対象に、ヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査では、「文京ひかりの里」における交流プログラムの評価、「文京ひかりの里」における交流プログラムの課題、「幼老統合施設型交流プログラム」のプログラム開発に向けた展開、を中心に聞き取りを実施した。

(3) 「幼老統合ケア型世代間交流プログラム」の検討

上記の調査の結果をもとに、研究者および施設職員とともにこれまでの「幼老統合ケア型世代間交流プログラム」の課題と今後に展開について議論を行った。

4. 研究成果

(1) 「文京ひかりの里」施設高齢者に及ぼす影響

本研究では、研究期間中に退居した者(n=2)、入院をした者(n=1)、死亡した者(n=1)、データに欠損がある者(n=5)を除く11名(男性=3名、女性=8名)を分析対象者とした(平均年齢 83.73 ± 10.57)。

DBD得点(Dementia behavior Disturbance Scale)およびNPI得点(Neuropsychiatric Inventory)について、表情評価(PAFED)(高群:n=7/低群:n=4) × 調査時期(6月、11月、3月)による反復測定分散分析を行った。

その結果、DBD得点について交互作用が認められた(p=0.047)。単純主効果検定を実施したところ、表情評価低群において6月時点よりも11月および3月時点における得点有意に低くなっていた(図1)。一方で、表情評価高群では変化は認められなかった。

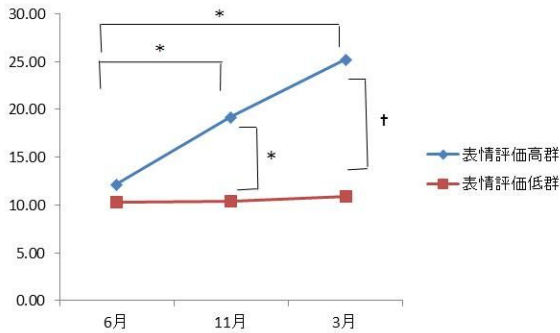


図1. 「表情評価高群」の変化

(2) 「文京ひかりの里」職員に及ぼす影響

本研究では、研究期間中に退職した者8名および欠損がある者1名を除く9名(男性=3名、女性=6名)を分析対象者とした。

介護負担尺度得点(J_ZBL_8)、認知症の人に対する態度得点(肯定的な態度/否定的な態度)、高齢者イメージ得点について、職業歴(職業歴1年未満:n=4/一般職員:職業歴2年以上:n=4) × 調査時期(6月、11月、3月)による反復測定分散分析を行った。その結果、認知症の人に対する「肯定的な態度」について、交互作用が認められた(p=0.005)。単純主効果検定を実施したところ、新人職員において6月時点、11月時点よりも3月時点における得点が有意に高くなっていった(図2)。

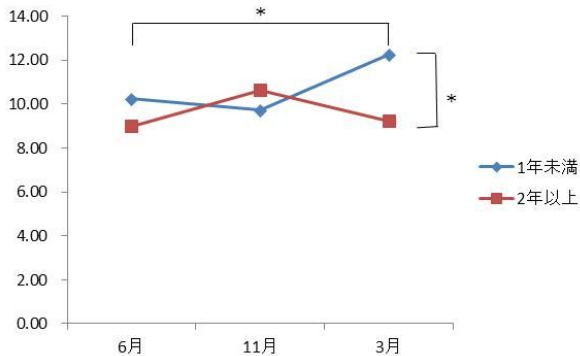


図2. 「肯定的な態度」の変化

(3) 交流日誌に見る施設高齢者と園児との交流

『交流日誌』からは、高齢者と園児の関係性として7分類が抽出された。それぞれの分類は、「1者関係(高齢者のみ)」、「2者関係(高齢者-乳幼児)」、「3者関係(高齢者-乳幼児-職員)」に整理された。「1者関係」には、2つの小分類(乳幼児見守りと乳幼児媒介)が抽出された。乳幼児見守りは、乳幼児の姿を注視する高齢者の行動、乳幼児媒介は、乳幼児が遊んでいる姿を見ながら高齢

者同士で会話をする行動を示している。「二者関係」には、3つの小分類(高齢者主体一方向、高齢者主体双方向、乳幼児主体双方向)が認められた。高齢者主体一方向は、高齢者が一方的に乳幼児に働きかける行動、高齢者主体双方向は、高齢者が乳幼児に働きかけ乳幼児がそれに反応している行動、乳幼児主体双方向は、乳幼児が高齢者に働きかけて高齢者がそれに反応している行動をそれぞれ示している。「三者関係」には、2つの小分類(スタッフ介入、スタッフ調整)が見いだされた。

高齢者に対する認知機能テスト得点(MMSE)をもとに、認知機能高群・認知機能低群に分けた上で、各群別の関係性分類を算出した。表2に、認知機能と関係性分類のクロス集計表を示す。関係性にカイ二乗検定を行った結果、二者関係において、認知機能低群では高齢者主体双方向および乳幼児主体双方向に関する記述が、認知機能高群よりも少ないことが示された。こうした結果から、認知機能が高い高齢者では乳幼児との関係性が構築される一方で、認知機能が低い高齢者では関係性が構築されにくく、そのためスタッフによる介入が重要になる可能性が示唆された。

表1. 認知機能と関係性分類とのクロス表

	認知機能高群		認知機能低群	
	n	%	n	%
一者関係 ($\chi^2=2.18$)				
乳幼児見守り	8	61.5	4	100.0
乳幼児媒介	5	38.5	0	0.0
二者関係 ($\chi^2=15.89^{**}$)				
高齢者主体一方向	31	33.0	19	76.0
高齢者主体双方向	39	41.5	2	8.0
乳幼児主体双方向	24	25.5	4	16.0
三者関係 ($\chi^2=2.01$)				
スタッフ介入	14	45.2	2	20.0
スタッフ調整	17	54.8	8	80.0

(4) 「幼老統合ケア型世代間交流プログラム」におけるコーディネーターの役割

高齢者と乳幼児の関係性に関する7分類をもとに、2013年5月17日(交流日誌の記入日)から2014年4月6日までの全記述について内容分析を行った。

具体的に、認知機能高群および低群に分け、施設における乳幼児との交流の様子に関するエピソードを抽出し、それをもとに保育学の専門家および施設職員とともに「施設におけるコーディネーター役割」を中心に検討をした。

関係性の特徴について図示したものを図3、図4に示す。認知機能高群についてみると、乳幼児と交流をした記憶が保持されていることから、日常的な乳幼児との交流により乳幼児との親密な交流が生じやすいことが示された。とりわけ、認知機能高群は、施設職

員から「乳幼児の世話」役割を与えられることで、次第に「保育者」として発達を促す役割を担っていることが明らかにされた。

認知機能低群では、乳幼児の名前や交流した記憶の維持が難しいため関係性が構築されにくいことが示された。とりわけ、認知機能の低下とともに身体機能の衰えが見られる認知機能低群は、乳幼児と交流しようとする気力が衰えているため、自然な状態では乳幼児との親密な関係性が構築されにくいことが示唆された。そのため、場面ごとに職員が介入をする工夫が重要になることが示された。

その一方で、数例ではあるが発症前から子どもに対して関心を抱いている認知機能低群には、積極的に乳幼児を見守ったり世話をしたりする場面が認められた。「今、ここで」乳幼児との交流を楽しんでおり、そこに自らの役割を担っている様子が見受けられた。

以上の知見をもとに、保育士とグループホーム職員との連携により施設高齢者の特性を把握するとともに、その能力に応じた長期的に計画する新たなプログラムの形が提案された。

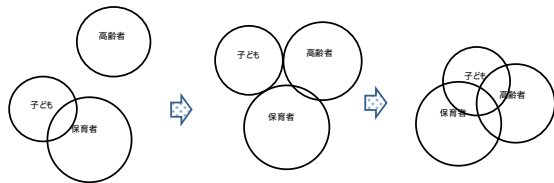


図 3. 認知機能高群と乳幼児との関係性

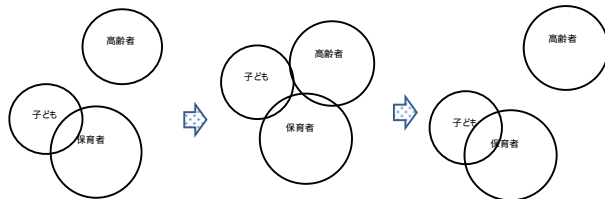


図 4. 認知機能低群と乳幼児との関係性

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

藤原佳典、高齢者のシームレスな社会参加と世代間交流-ライフコースに応じた重層的な支援とは-、日本世代間交流学会誌、査読有、Vol14 (印刷中)。

〔学会発表〕(計 1 件)

村山陽 藤原佳典他、幼老統合型施設における幼児とのふれ合いが認知症高齢者の行動・心理症状に及ぼす影響、第 73 回公衆衛生学会総会、宇都宮、2014.11.5-7。

〔図書〕(計 1 件)

藤原佳典、世代間交流活動の意義。倉岡正高編、地域を元気にする世代間交流、公益財団法人社会教育協会、2013、pp.28-35。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤原 佳典 (Fujiwara, Yoshinori)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長

研究者番号：50332367

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：